

第 7 章 和泉に於ける「伝統的第Ⅴ様式」 に関する覚え書

—— 豊中遺跡出土遺物の整理をして ——

I はじめに

ここ数次にわたる豊中遺跡の発掘調査に於て、弥生時代末～古墳時代前期に位置付けられる諸遺構の検出と相まって多数の土器群が出土し、個々についての簡単な観察事項は別に載げた。これら土器群は、単に弥生式～土師式土器の移行過程を明示するのみならず、まさに「古墳出現前夜」というすぐれて重要な歴史的 position にある由に近年とりわけ研究者の注目を受けるところである。この和泉地方でもこれ迄多数の資料蓄積をみ、和泉市池上遺跡や多数の周辺遺跡群の調査により、それらが初期農耕集落としてこの地の拠点的作用を果たしてきた池上弥生時代集落が強い対外的諸関係動向の中で中期後半（第Ⅳ様式）のある時点を境にし変質し多数の小集落群への分解を指向するという歴史過程の中に位置付けられることが理解されるに至った。筆者は遺物整理の立場から得られた知見をこれ迄にもとりまとめたが、今回更に豊中遺跡出土遺物を整理する機会を得て、ここに従来の認識を踏えつつそれらの持つ歴史的意義を考えてみたい。とりわけそれらが既に認識論的に設定した「伝統的第Ⅴ様式」土器群の具体的実態を示すものとして注目することになる。また豊中遺跡でも出土をみたが和泉地方の製塩土器についても若干紹介しておく。なお本論は、和泉市上町遺跡出土土器群の整理過程でまとめた拙稿「和泉における弥生式～土師式土器の移行過程について——認識論的作業仮説として——」『上町遺跡発掘調査概要』1975年に後続し、かつ重複する部分も多いが参照していただければ幸である。

II 認識の整理

これ迄和泉地方の弥生時代後期（第Ⅴ様式）～古墳時代前期（布留式）に至る土器群を概観していくつかの知見を得ている。即ちこの過渡期に実在するのは「伝統的第Ⅴ様式」・「庄内式」土器群に加えて、なおまだ整理概念としての「装飾性の強い」・「外来系」・「布留式傾向」土器群等が存在する。後者の土器群の実態は現時点迄には十分把握してはいない。

それら土器群は時間差により組み合わせ構成に変化をみせ、第Ⅴ様式——過渡期Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ——布留式と区分し得ることが理解されることとなった。

これには次の補足が必要となる。「第Ⅴ様式」と「布留式」の「過渡期」とは、都出比呂志1974年の「第Ⅵ様式」にはば該当する。また「布留式」とは坪井清足1965年の指摘する「小若江

北式」を該当させるが、広義の「布留式」に於て「小若江北式」はやや後出する位置を占めており、より先行する土器群の存在が考慮される。和泉地方では七ノ坪遺跡が「小若江北式」より先行する一括遺物を出土し、この地方の標式となる。都出氏は河内地方の編年で「上田町Ⅱ式」直後に「小若江北式」を位置付けるが、この時点では既に小型三種土器そのものの形態がややくずれており、七ノ坪遺跡のより典型的土器は先行することになる。「外来系」土器群としては「庄内式」甕・「酒津式」甕・「S字状口縁」甕等が知られるが、なお不確定の土器群が多い。

「装飾性の強い」土器も不確定である。「外来系」土器群に対して、論理的には「在地系」土器群が存在する。これ迄の調査成果から、和泉地方には「第Ⅴ様式」以後もその製作技術が基本的に踏襲されるとする立場をとり、「伝統的第Ⅴ様式」を設定し、「在地系」土器群を表象する。もし他地方でも同様に「第Ⅴ様式」の踏襲が検証されれば、各地の「伝統的第Ⅴ様式」を認め得ることになる。私見では「庄内式」甕という極めて先進的土器製作を実施する(諸)集団を除き、大多数はなお「伝統的第Ⅴ様式」土器群を継続・製作していたと理解する。その後「布留式」の伝播はかなりの全国的規模を持ち、この時点で各地の土器製作をめぐる諸状況が大きく変換することになる。「布留式」出現の実状はまだ十分に理解しないが、ついてはいくつかの示唆的狀況が観察される。即ち、各地の「伝統的第Ⅴ様式」と河内の「庄内式」甕は技術体系を別個にする諸集団により製作されており、河内の「庄内式」甕と「布留式傾向」甕は製作技術や形態が近似するにもかかわらず、胎土や色調が全く異なる。かつ「庄内式」甕は「布留式」直前に於てその製作・供給が衰退し、土器そのものも退化する。由に「布留式」甕の出現が、河内の「庄内式」甕生産集団とは別個集団とのかかわりをもったことが推定され、その同定については「伝統的第Ⅴ様式」及び「庄内式」に平行する「布留式」以前の「布留式傾向」甕の製作集団所在地が問題となる。従来知られている諸集団には「布留式傾向」甕の製作は検証されていない。しかし河内の「庄内式」甕生産集団との技術的近密性や甕の丸底化・刷毛調整の先行から大和地方の特定集団が考慮されるかも知れない。

「製塩土器」あるいは「土器製塩」に関する認識はこの地方では不十分であり、我々も岸和田市土生遺跡出土遺物の整理を踏み台として、ようやく製塩土器の識別を始めたばかりである。ここでは代表的な製塩土器を紹介し、それにかかわる知見を簡単に述べておきたい。

Ⅲ 「庄内式」の意義と実態

和泉市池上遺跡出土土器を概観した佐原真・井藤徹1970年は「池上遺跡の終末」に関して次のように述べた。「第Ⅴ様式土器は多くない。しかし壺・長頸壺・細頸壺・鉢・器台・甕など一通りの器種をみる。長頸壺には、記号、絵面をつけたものがある。なお、第Ⅴ様式における他の地

域からの搬入品としては河内の土器として西ノ辻Ⅰ式がある。つぎの庄内式の甕も数個あるがいずれも河内からもたらされた土器である。同時期の和泉自体の土器をつかむことが急務である。」。そこでは和泉地方に於ける弥生式～土師式土器の移行過程を究明する出発点として、一つの示唆的な作業課題を提示した。とりわけ河内産「庄内式」甕に対して、まだ実態が不明だった在地系土器群を想定し区別して究明しようとする方向性は当然かつ重要でありながら、各地域に於ける諸研究に必らずしも十分理解されているとは言えない。

そもそも弥生時代後期の「畿内第Ⅴ様式」に後続し、古墳時代前期の「布留式」に先行する土器群を「庄内式」として論理的に位置付けたのは田中琢1965年である。氏はその標式たる甕が「第Ⅴ様式」と「布留式」の両者にかかわる技術をもって製作されていることに注目し、それに伴出すると思われる土器群を含めて「庄内式」土器として紹介した。そして「この庄内式は、現在のところ、摂津・河内・山城には確実に存在し、和泉にもおよんでいるらしい。」と記述し、その時点でこの和泉地方にも出土することをほぼ推定している。また「和泉にもおよんでいるらしい。」という文章ニュアンスからすれば、和泉地方に「庄内式」土器群が搬入され、時間的に並存する在地系土器群の存在を前程としているとともとれる。しかしこの時点には甕の胎土が暗褐色の色調を呈することが多いとしながらも、なおまだそうした問題を十分に意識しなかったとするのが妥当であろう。

それに先立って原口正三他1962年は、船橋遺跡を調査し、K地区Ⅰ層でのこの種甕がⅤ地区Ⅱ層での第Ⅴ様式風土器群に後出すると理解したが層位的資料としては必らずしも良好でないとされた。そして上田町遺跡の調査をむかえる。1968年同氏は同遺跡をⅠ～Ⅲ層に区別して発掘し、その第Ⅱ層にまさしく「庄内式」甕（上田町Ⅱ層甕B）が包含され、第Ⅴ様式風甕と共存し、かつ下位の第Ⅰ層にはまだ出現していないことを確認した。更にその胎土が田中琢氏が観察したと同じく暗褐色ないし黒褐色を呈することに注目し、これが「器壁を内面から薄く削る技法に伴った焼成技法であろう。」と述べ、器種・製作技法・胎土の色調（焼成技法）の関連と共に更には煮沸用器としての機能に至る迄の一連の関連を指摘した。この種の胎土は金・黒雲母粒を含み地質的には河内地方の堆積土壌に関連するものとされ、今日では中河内南部～南河内北部のより限定された地域に関連することが理解されている。

こうしたことを前提とすれば、極めて重要な問題が提起されることになる。「庄内式」甕が黒褐色系の色調と雲母粒を含み河内地方のより限定された地域の胎土を持っているとすれば、それと伴出する他の土器群はいかなることになるのだろうか。和泉地方での観察結果による限り、「庄内式」甕を除いてはこうした胎土を持つ土器はほとんどない。この状況は単に和泉地方にと

どまらず、他地方等でも同様である。搬入地たる地域では当然のことながら、河内地方に於てすら「庄内式」甕のみが他と区別された特殊な胎土が用いられる現象は注目されよう。同一地域で製作された土器群中「庄内式」甕のみに特殊化された胎土が使用されたのか、あるいは甕のみが他の土器群とは異なった特定の地域で製作されたのか、論議が分れよう。田中琢氏が、尖底気味の丸底・内面篋削り技法・細かい叩き目・刷毛目調整等に特徴付けられる甕をもって「庄内式」を規定付けたにもかかわらず、氏が一括紹介した他の土器群がいかに関連するのかは十分検討されてはいなかった。胎土のみならず形態や製作技術からも両者の共通性はほとんど検証されないのが現状である。例え伴出しても型式学的に考える限り両者は明確に分離されるのが正当と考えられる。

それでは型式学的に「庄内式」土器が厳密には特定の甕のみに該当するとすれば、それ以外の土器群はいかなる呼称がなされ得るのか。いわゆる「庄内式」甕に顕著な内面篋削りや底部の尖底に近い丸底化・細かい叩き目や刷毛目調整といった諸技術は、同時代の畿内各地方ではほとんど確立をみないまま「布留式」の時代を迎えることになる。即ち「庄内式」甕にみられる先進的な土器製作の技術はある限定された特定集団のみの所有であり、他地域の諸集団はその土器を大量に搬入しつつも全くその製作技術を取り入れることはなかった。その甕が使用されている時代という意味で「庄内式」を用いることは可能だが、各地の実態を重視する立場をとればあくまで特定集団の作り出すその甕のみに該当するのが妥当であろう。こうした状況は、各地で第Ⅴ様式風の伝統をそのまま受け継いだ多くの土器群と明確な河内地方からの搬入品たる「庄内式」甕と共存出土することにより検証される。そこで第Ⅴ様式以後「庄内式」を特徴付ける新技術が出現する時点をはば境にし、それ以前の土器群を「第Ⅴ様式」、それ以後継続して第Ⅴ様式の伝統をはば受け継いで製作され続けるものを「伝統的第Ⅴ様式」と呼んで区別する。もちろんすべての土器を無制限に総称するのではなく、この時期には他地方の各種土器群の搬入も考慮されるが、これ等を「伝統的第Ⅴ様式」の土器群に含み込む意図はない。

さて田中琢氏は「庄内式」提唱の時点で「古墳時代の土器が土師器であり、甕の内面へらけずりに代表される技法が畿内の土師器に固有のものならば、現在さかのぼり得る最古の土師器である。」とした。やはりこの場合でもそうした技術による甕のみを限定して「土師器」とするのか、あるいは伴出する土器群全体を「土師器」とするのが不明確である。筆者はこの「庄内式」甕が畿内諸集団に対して搬出・供給されるべくかなり規格性を持っていること、河内中～南部のより限定された地域に於てある特定の(諸)集団により製作された可能性が考慮されること、煮沸用という限定された機能を持たせた一つの器種のみが大量に製作されていること、供給・搬入を受けた消費集団が煤の付着状況の画一性からみてある一定の使用法が限定された可能性が強

いこと、等から「庄内式」甕に「統率化された土器製作の専業集団が製作した土器」との可能性を認め、こうした意味から最古の「土師器」に該当させる。古墳出現前夜の集団関係を論じた都出比呂志1974年は、「これを古墳出現時の土器と認めない立場に立ち、土師器と呼ばないで弥生式土器に含ませようとするれば、畿内第Ⅴ様式との連続面と共に、内面篋削り技法の西からの伝播が加わっている点も考慮して、これに畿内第Ⅵ様式の呼称を与えては如何であろうか。」と提唱した。しかし和泉の地ではあくまでこの時代に「庄内式」甕を製作しているのではなく、これを搬入しつつも前代からはほぼ継続して「伝統的第Ⅴ様式」土器群を製作している事実があり、こうした意味から同時代の土器でも先進的な庄内式甕を「土師器」とし、「伝統的第Ⅴ様式」土器群を「弥生式土器」と区別するのも極めて妥当性があると考えられる。

なお「庄内式」甕の器表面を観察すれば、かなり厚味をもって煤が付着していることが通例である。より古い「第Ⅴ様式」や「伝統的第Ⅴ様式」の煮沸用甕表面が細々に複雑なバラエターを持つこととは対照的である。「庄内式」甕の濃い煤は、酸素供給が不十分な方法での使用が限定され、中世の羽釜類の器表面の煤付着状況程はいかないにしてもかなり近い様相をみせており、あるいは「カマド」状施設の利用も推定される。

ところで豊中遺跡「河川」状遺構出土の「庄内式」甕は当然のことながらその基本的特徴に於ては一般的なものと共通するが、細部については若干の特色が観察される。法量や器形については問題ないが胎土中には全般的に雲母粒がより細かいものが多く、観察が困難なこともある。また色調が黒褐色や暗褐色のものもあるが、かなり灰色味が強くなってきている。更に形態的なことでは、口縁端部が明確に上方へつまみ上げられているものの他に、方形や丸味を持ってそのままおさまる例が多くみられる。「上六万寺～北鳥池式では口縁部外面のヨコナデが強調されて二段に外反する口縁形態となる。そして、この種の口縁は北鳥池以後、退化しながらも上田町Ⅱ式の丸底で内面篋削りを行なう甕にまで存続する。」芋本隆裕・稲山数士1975年という河内地方の口縁端部の流れからみれば、端部が上方へつまみ上げを特徴とする通例の「庄内式」甕より更に退化した様相と言える。これは豊中遺跡内に於いて第1次調査でのやや先行するAV-3土器群中には13個体以上の「庄内式」甕が出土したが、いずれも黒褐色を呈し口縁端部が上方へ明確に突出したし、C地区の最も新相の庄内式甕が丸くおさまる口縁端部を持つことからいえる。細部の特徴を問題とするには理由がある。時代的には「庄内式」甕の次に来るべきは「布留式」甕だがやや内弯気味にのびる口縁部と内側に肥厚する端部をもってその基本的特徴の一つとされ、両者に細部ながら相反する流れをみせている。加えて、形態・製作技術・胎土といった基本的特徴についても「庄内式」甕と「布留式」甕とは、内面篋削り技法を除いて共通しないことは、両

者の相対的關係の実態を明白に示している。田中琢氏が「庄内式」甕を「布留式」甕の時間的先行土器として位置付けたのは適確な作業だが、両者の直接的な相対關係を必らずしも明確にしていたとは言えない。なおまだ現在に至っても「布留式」土器群の成立経過は明らかではないが、各地の「伝統的第Ⅴ様式」や河内の「庄内式」以外の「布留式傾向」甕を既に生産している集団の存在が考慮される。「庄内式」甕の粗雲母粒を含み黒褐色を呈する胎土から、極細雲母粒を含み灰色味の強くなる胎土への大まかな変化についてはいくつかのことが考えられよう。従来の研究から衆知されるように河内地方中～南部の平野部の沖積土壌中には通例極めて粗い雲母粒が包含され、そうした胎土や色調の変化は使用粘土の変化や製作地の変化と理解することも可能である。製作地の変化を認めない限り現時点の認識では「庄内式」甕に用いられる胎土がやはり煮沸用としての機能に資する目的で人為的に配合されたと考えている。この場合より粗い雲母粒を含む堆積土壌から、より細かい丘陵地土壌への配分移行が考えられる。

IV 「伝統的第Ⅴ様式」土器群について

「過渡期」

土器溜)では、甕・高坏・壺等が確認されているが、「庄内式」甕の伴出は全くない。特徴の観察しやすい甕は2個体あり、いずれも上・中・下部の接合をもって胴部を成形している。外面は叩き調整だが、上位は水平方向、中位は水平方向と左下り、下位は左下りと明確に区別される。内面は平滑にされ、篋削りは施されない。高坏は「第Ⅴ様式」を受け継いで、碗状の坏部及び屈曲して外反する口縁部の坏部を持つ二種が存在する。前者はこれ以後ほとんどみられなくなる。

「過渡期Ⅱ」

それに後続する第Ⅱ段階に位置付けられる上町遺跡(「井戸」状遺構)では、甕・壺・高坏・鉢・コップ形土器・短頸壺等が確認されており、若干ながら「庄内式」甕片も加わる。また注意されることは、概報作成時には識別されなかったが10個余の製塩土器脚台部の出土をみている。現在この地方で最も先行する製塩土器である。甕は平底で内面は篋削りを施こされない。なおまだ壺・高坏・大型鉢・コップ形土器等は「第Ⅴ様式」の伝統を強くとどめているが、高坏・壺には粗雑ながら装飾性を持つものが含まれる。櫛描き波状文・円形浮文・凸帯・竹管文により構成されている。

今回調査された豊中遺跡(「河川」状遺構)では、甕・壺・鉢・高坏・坏・埴・小型器台・手焙形土器等により構成される多数の土器群と40個体を上まわる「庄内式」甕の出土をみた。加えて西岸に位置する住居址及び周辺地域他から20個体近くの製塩土器の出土がある。壺・高坏には極めて装飾性の強いもの、高坏には篋磨き暗文の施こされるものや半球形の坏部を持つ新たなもの等が認められるも特徴である。上町遺跡出土土器群と似た器種構成をなすが「庄内式」甕が著しく多いこと、坏・埴・小型器台といったより新しい器種を含むこと、高坏に新たな技法・器形(これは搬入品と思われる)のものを含むこと、更には全体の器形から判断してより新たな様相が徐々に認められわずかに後出するものである。しかし基本的には「過渡期Ⅱ」の組み合わせ構成を持ち、上町遺跡をより(古)相、豊中遺跡をより(新)相として理解することができる。やはり甕には内面篋削りは施こされず以前の伝統をそのまま受け継いでいるが、口縁端部にキザミを持つものが多いのは特徴的である。壺・高坏の装飾はこの時点では確立し、ある一定のパターンと丁寧さをみせている。即ち壺は口縁部を櫛描波状文と竹管文を有した円形浮文、頸部下端には指突文をつけた断面三角形の貼り付け凸帯、体部上端には櫛描波状文を施こす。体部は欠損し不明である。高坏は坏口縁部と脚裾部を櫛描波状文・竹管文・円形浮文・櫛描直線文をもって装飾する。壺については、胎土・成形技法・調整法から判断して在地系の土器と考えられる。「庄内式」甕はいずれも河内地方からの搬入品で、「伝統的第Ⅴ様式」甕と比較してその約30%以上を占める数となる。口縁端部が丸くあるいは方形におさまる等この種の甕では(新)相を呈するも

のが多い。小型器台は小型丸底埴あるいは小型鉢と組み合わせあって「小型三種」土器群として次の来るべき「布留式」を特徴付けることになるが、今回は6個体の小型器台のみ単独出土した。外からの影響をもって出現したのだろうが、それらの胎土・製作技法がこの地に一般的な土器群と共通する。粗い叩き目及び篋磨き調整が施こされている実例が含まれる。加えていずれも外面に赤色のスリップが塗られていないことが、「布留式」小型器台より先行するものであることを示している。「関東において、小型器台は前野町期・小型丸底壺は五領期にそれぞれ出現し、古墳時代の開始とともに両者は共存するようになる。しかしこれは関東だけに見られる現象だけでなく、各地に見られる現象である。」（高橋一夫 1975年）という指摘に合致しよう。

「過渡期Ⅲ」

豊中遺跡C地区では、やや時間巾をもって「伝統的第Ⅴ様式」土器群として、甕・壺・高坏・鉢等に加えて極めて「布留式」を呈する甕・小型丸底埴・小型鉢・坏・高坏・他が多数加わる。即ち、「過渡期Ⅲ」の組み合わせ構成をもつこの時点では「庄内式」甕の存在はほとんどなく断片にとどまる。その口縁端部は丸くあるいは方形におさまり、小さな平坦底がとりつくという極めて新しい様相を呈する。「伝統的第Ⅴ様式」甕は前代と連続するが、内面をはっきりした粗い刷毛目調整するものが含まれる。壺・鉢の主体となるのはやはり前代と連続装飾を持つ壺も遺存する。装飾パターンは基本的に変化ないがかなり簡略化され波状文も乱雑に描かれる。高坏は外反する口縁部の坏を持つものが少数ながら存続する。この時期の特徴はやはり多数の「布留式」土器群であり、細かい横方向の篋磨き調整される小型丸底埴・高坏・坏・小型鉢や刷毛目調整される球形体部の甕・楕円形体部の壺が多数加わる。こうした組み合わせ構成は北接する七ノ坪遺跡出土土器群と共通し、この豊中遺跡C地区がその遺跡の一部であることが理解される。この時期、即ち「過渡期Ⅲ」に追加される「布留式」土器群はいわゆる「小若江北式」土器群よりわずかに先行するものである。同様の組み合わせ土器群を出土する遺跡としては他に土生遺跡（A地区・溝状遺構）がある。前後やや時間巾をもって堆積したものだが、「伝統的第Ⅴ様式」甕・壺・高坏・製塩土器他「庄内式」甕、「布留式」甕・小型丸底埴・小型器台・小型鉢他、高坏他が認められる。

「布留式」

このように組み合わせ構成の変化をみせつつも、やがて「布留式」土器群が「伝統的第Ⅴ様式」土器群に代って主体をなす。この時期の標式的遺跡として古池・上池遺跡があり、その「布留式」土器群の検討については芋本隆裕氏が第6章3で実施するところである。

「伝統的第Ⅴ様式」

こうした「第Ⅴ様式」～「布留式」の移行過程を示す和泉地方に於て、その在地系土器群として主体をなす「伝統的第Ⅴ様式」土器群はおおむね次のような本質性を持つ。胎土は個々複雑な色調を呈しつつも、黄色味の強い色調で、砂粒を含むことが一般的である。この地方の地質は砂岩をもって主体となし、含まれる砂粒もこれに関係する。焼成は全般的に不良なものが多く、軟質である。その為器壁表面が剝落することが多い。「庄内式」甕や「S字状口縁」甕他著じるしく器形や製作技術の異なる各種土器群の胎土とは識別されることがある。器種は壺・甕・高坏・鉢・埴・小型器台・坏・手焙形土器・コップ形土器があるが、そのいくつかは時間的により追加されるものも含まれる。これに製塩土器・蛸壺形土器等が遺跡の性格と相まって追加されることがある。「第Ⅴ様式」を特徴付けた長頸壺・器台は全く欠落する。当然長頸壺等によくみられた記号・絵画も全く描かれることはない。基本的な製作技術は粘土紐積み上げ・分割成形・粗い叩き調整・横ナデ調整・ナデ調整・部分的刷毛調整・指圧・キザミ・篋磨き調整等が用いられ、底部は平底を原則としている。技術的には「第Ⅴ様式」のものをほぼそのまま踏襲していると言える。細かい叩き目・甕の内面篋削・刷毛調整の多用・篋磨き暗文・細かい横篋磨き・丸底・埴外面の削り他といったより新しい技術は原則として用いない。より先進的な「庄内式」甕や「布留式傾向」甕の出現が、「伝統的第Ⅴ様式」土器群の技術体系とは別個の歴史的状況で行なわれたことは極めて注目される。和泉地方ではそうした技術にかかる土器はいずれも搬入された可能性が高く、そこにある特定（諸）集団の持つ土器製作技術が単に文化的伝播をもって簡単に移動しない事実が確認されることになる。この時代に於ては既に土器製作の先進的技術はまさに特定（諸）集団の所有であり、単に文化的技術ではなくなっていたのであろう。とりわけ「庄内式」甕が強い社会的側面に裏付けられて存在していたことは明らかである。ある生産物にかかわる保守的状況と先進的状況とが共存しているこの時代に於て、和泉に於ける土器製作は「第Ⅴ様式」の体系をほぼ踏襲し、まさに伝統性を遺存させつつ「伝統的第Ⅴ様式」土器群を製作し続けた事実は、和泉地方の持つ歴史的立場を明確に示唆していると言えよう。

V 製塩土器

大阪湾の東側沿岸の和泉地方で弥生時代末～古墳時代前期の製塩土器が出土することが最近多くなった。豊中遺跡でも約20個体の出土をみた。従来より瀬戸内海沿岸諸地域や紀伊半島沿岸諸地域に於ける土器製塩の実態が究明されつつあるのに対して、両地域の間中に位置するこの地方では極めて不明で、現在ようやく同種資料の蓄積が開始されたばかりである。現時点で土器製塩に関し論述するにはまだ認識不足であり、これ迄の諸経過を簡単に整理し、代表的な製塩土器を

紹介するにとどめる。

さかのばればこの地方で製塩土器の出土をみたのは1959年の高石市羽衣砂丘遺跡がある。それは既に森浩一『製塩についての二つの覚え書』1960年や近藤義郎『吉目良遺跡』1964年に紹介されている。だが出土数も少なく近藤氏の「目良式B類」にほぼ該当する高い脚台等が含まれるとわかった程度である。当時の「目良式土器」の分布は大阪湾沿岸で羽衣砂丘遺跡 1ヶ所に過ぎず、既に製塩遺跡の調査が集中されていた紀伊半島沿岸諸地域の著じるしい分布とは対照的であった。その地方での諸成果は、前記『吉目良遺跡』や、同志社大学『紀淡・鳴門海峡地帯における考古学的調査報告』1968年としてまとめられた。

その後和泉地方ではいぜん製塩土器の出土をみなかったが、1971年西山要一氏は泉南市双子池遺跡に於てかなりの製塩土器を採集すると共に『泉南市双子池遺跡採集の遺物——特に製塩土器について』と題してそれらを紹介した。それによると、双子池遺跡は男里川の上流 2.5Km、現時点の海岸線より 1.5Kmの標高10～15mに位置する。遺物は双子池の周堤中の粘質黒褐色土層及びこの土層が崩壊して積った池底層中より採集された。弥生時代中期以降の土器や須恵器に混って出土した6個の製塩土器脚台を紹介している。高さ1～3cmを測る脚台は外面に指押痕を持ち、叩き目を持つものが3個体ある。遺存部から判断すると体部が細い筒状を呈するもの5個と反鈎鐘状を呈するもの1個に区別される。そして「紀伊の弥生時代製塩遺跡、あるいは岬町、小島東製塩遺跡などを見ると、その立地は海浜や海に面する狭小な谷あい、狭小な孤島の海浜である。少なくとも双子池遺跡は、このような条件を満たさないし、とうてい塩生産を行なった遺跡とは考え難い。」と述べた。とりわけ、典型的な紀伊地方の製塩遺跡との立地条件の差異に注目したことは特記される。

また同年双子池遺跡の北東6Kmの泉佐野市三軒屋遺跡では縄文式土器～土師器に混って2個の製塩土器の出土をみた。藤田正篤氏は「弥生式土器高坏様土器脚部（タタキ文）、底面に指紋らしき痕あり、指整形か？弥生式土器・高坏様土器脚部、内面指で斜めらせん状に成形した痕が10条程ある。外面も凹凸多し、指整痕か？、表面はほとんど灰白色、径1～2mmの砂粒を多く含む。」と観察した。図示された4は双子池遺跡のものとはほぼ同形だが、5は高さ6cm弱の高い裾広きの脚台を持ち、若干異なる形態を持つ。この遺跡も現海岸線より約3Km入り込む標高20m弱に立地する。

こうした諸経過を経て我々の眼前に製塩土器が出土したのは1974年の和泉市上町遺跡である。この遺跡では「井戸」状遺構中より多数の「伝統的第Ⅴ様式」土器群に混って10個以上出土したが、当時土器製塩に関する認識が不十分で、それらを製塩土器と識別し得なかった。『上町遺跡発掘調査概要』（1975年）では、「今回確認された高坏は2種である。この他脚台のみにとどま

るものも2種あり、いずれも高坏と断定されないので脚台として取り扱っておきたい。」と記述した。いずれも体部を欠損した脚台部だが、その器高が5 cm以上～7 cmと極めて大型であることが特徴である。それらを紹介すると次のようになる。

(a) 高さ6 cm以上、脚端径約9 cmの非常に大型の脚台を持つ。3個体ある。(1)は裾広がりだが、下半で内弯気味により広がる。外面下半には粗い叩き目、内面は極めて平滑。外面に白赤色の斑点、上端は白赤色、(2)は中しぼりの中実柱状部と裾広がり脚台を持つ。やはり下半でより広がる。外面下半に粗い叩き目、内面は平滑。全体に灰黄色。いずれも粗砂粒多し。(3)は裾部が欠損する。白赤色の部分がある。

(b) 高さ6 cm、脚端径7.5 cmの脚台を持つ。1個体のみ。中実の高い柱状部に曲線的に広がる裾部を持つ。内外面とも平滑。柱状部及び裾内面は白黄色、裾部外面は灰黒色を呈する。細砂含む胎土。

(c) 高さ5 cm程度、脚端径6 cm～7.5 cm程度を測る。7個を数え、数的には主体をなす。裾広がり脚台だが、下半でより広がるものが多い。外面には叩き目、内面には篋押痕がみられる。(6)(7)のように上方あるいは下方より竹管状のもので押圧されるものや、(5)(6)のように体部との接合部に三方の切り込みが施こされるものがある。ほとんどが白灰色に近い色調に変化する。細粒を含む胎土。

伴出する土器群は、「過渡期Ⅱ」のより前半に比定され、現在和泉地方の製塩土器では最も先行する。上町遺跡は信太山丘陵から大阪湾に向って派生する標高約17 mの小丘陵上に立地し、現在の海岸線より約2 kmに位置する。当時の高師浜が現在よりかなり入り込んでおり、それでも1.5 kmは離れていたと考えられる。

更に同年、岸和田市土生遺跡A地区「溝」状遺構中他より100個以上の製塩土器が出土した。一部図示されたが多様な形態が混存している。この遺跡の第2阪和国道予定路線内の調査では、竪穴住居址が発掘され、製塩土器の出土はそれを含めて広範囲に及ぶ。現在岸和田市教育委員会が発掘調査中で、更に実態が究明されよう。遺跡は標高15 m程度の沖積平野上に立地し、現在の海岸線より2 km離れている。

今回調査の泉大津市豊中遺跡では約20個体の製塩土器が出土した。個々については既に別記した。注目されるのは竪穴住居址中及びその周辺からいくつか出土したことで、その使用地がかなり明確となった。やはりこの遺跡も標高12～18 mの低位段丘下位面に立地し、海岸線より約2 km離れている。

最近大阪府教育委員会による和泉市伯太遺跡の調査でも製塩土器が多数出土し、現在整理され

ている。この遺跡は標高20m近く、現在の海岸線より約 2.5Km離れた平地に立地する。この他最近では和泉市教育委員会による伯太北遺跡の調査でも多くの製塩土器の出土がある。標高約15m弱、海岸線より 2.5Km離れることは他遺跡と共通する立地条件を持つ。

さてこれ迄に把握したことを一応整理してみよう。

1. 大阪湾の東側沿岸地方で弥生時代末～古墳時代前期の製塩土器を出土した遺跡として、双子池・三軒屋・土生・伯太・伯太北・豊中・曾根・上町・羽衣砂丘他が知られている。
2. 羽衣砂丘を除き、現在の海岸線より 2 Km程度内陸の標高10～20m程度に立地し、紀伊半島沿岸の製塩遺跡の立地とは極めて異なる。
3. 豊中・土生では竪穴住居址内及びその周辺より製塩土器が出土し、他遺跡も諸状況からその可能性が強い。製塩土器は10～数 100 個と比較的少ない。また脚台部が遺存するに過ぎないが、その多くに熱あるいは化学反応による胎土・色調の変化が観察できる。現時点では「炉」の検出はない。同様の状況は6世紀代に至る諸遺跡迄も認められる。

次に製塩土器の分類をする。規準は主に脚台部の形状をもって行なう。

- I類 脚台高6 cm以上、脚端径約9 cmを測る極めて大型の脚台。体部は不明。脚台は大きく裾広がりを呈する。外面下半に叩き目。
- II類 脚台高6 cm以上、脚端径約7 cmを測る極めて大型の脚台。体部は不明。高い中実柱状部と広がる裾部を持つ。外面には叩き目が施こされるもの(a)、平滑なもの(b)がある。
- III類 脚台高約5 cm、脚端径約6 cmを測る裾広がりの脚台。なおまだ上半に柱状部のなごりをとどめるものもある。筒状の体部がとりつく。外面に叩き目が施こされるもの(a)、平滑なもの(b)がある。
- IV類 脚台高約3 cm、脚端径約6 cmを測る裾広がりの脚台。外面に叩き目の施こされるもの(a)、平滑なもの(b)がある。筒状の体部がとりつく。
- V類 脚台高約2 cm、脚端径5 cm弱の小型裾広がりを呈する脚台、筒状の体部がとりつく。外面に叩き目が施こされるもの(a)、平滑なもの(b)、指ナデされるもの(c)がある。
- VI類 脚台高約2 cm、脚端径約5 cmの小型裾広がりを呈する脚台、反釣鐘状の体部を持つ。外

面にはかすかな指ナデ痕。

Ⅶ類 脚台高約2cm、脚端径約4cmの極めて小型裾広がりの脚台、反釣鐘状の体部を持つ。外面は指ナデがなされる。

以上のⅠ～Ⅶ類に形態分類がなされる。一応編年試表を次に作成したが、正確な型式編年はより検討して今後作成したい。(第1図)

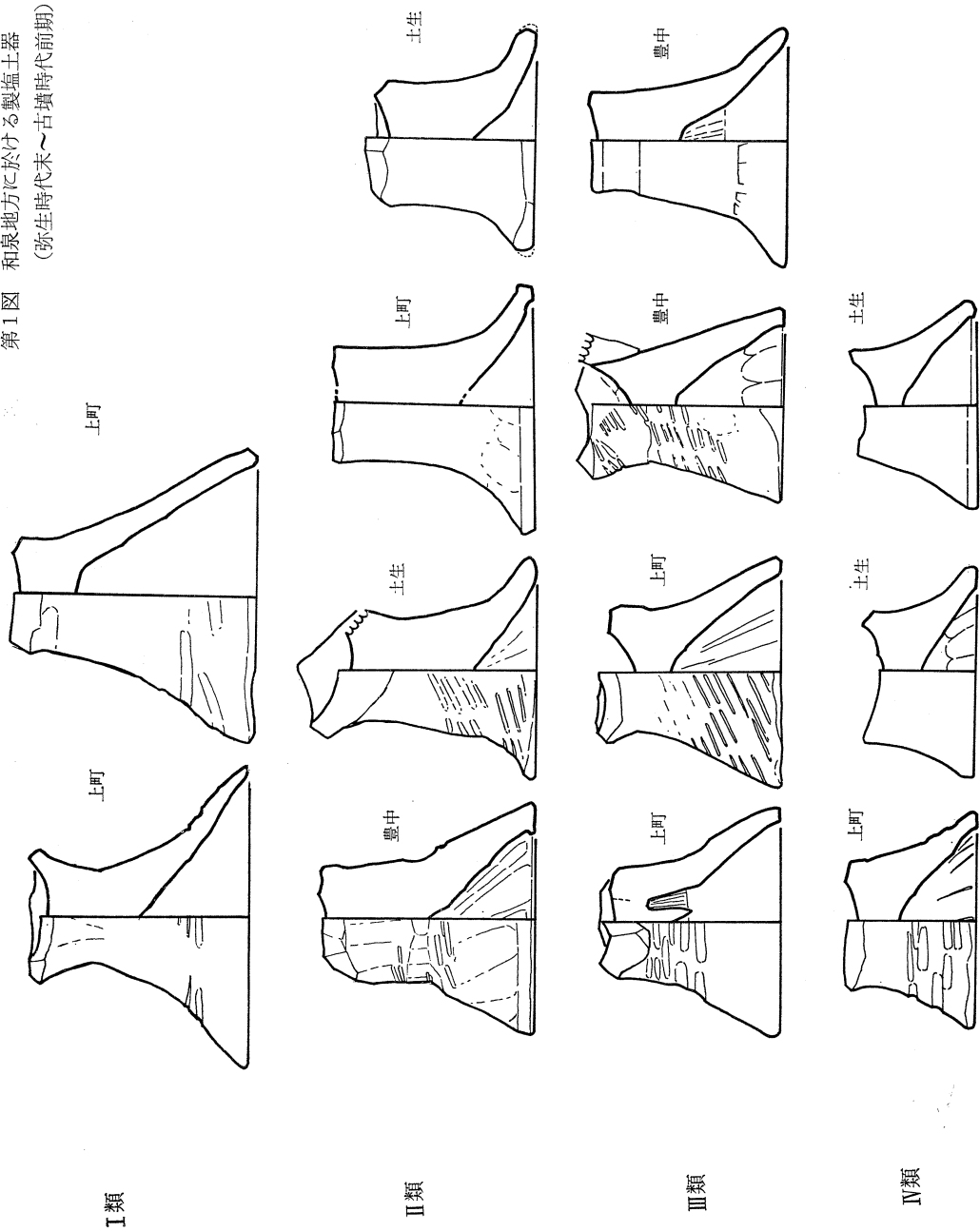
そこで紀伊半島沿岸地域の製塩土器と比較する。『紀淡・鳴門海峡地帯における考古学調査報告』では弥生時代～古代迄の製塩土器をA～G類の7型式に分類し、B類は弥生時代後期、C類が古墳時代前半期、D、E、F類が古墳時代後半期、G類が奈良時代をそれぞれ中心とするものと考えた。注目されるのは、A類が唐古第Ⅳ様式土器に近似することから、弥生時代中期後半にさかのぼる蓋然性をもつものとし、「A類の製塩土器がもし弥生中期にまで遡るものであるとすれば、弥生後期から古墳時代にかけて各地に出現する脚台付製塩土器が、弥生後期にまず備讃瀬戸において成立し、これが各地に影響を与えたとする従来の見解を改めなければならないことになる。」と指摘した。先立って近藤義郎氏は、弥生時代後期後葉の製塩土器として「目良式B類」を設定していた。それは同志社大学のB類にほぼ該当する。そして「弥生時代後期のある時点に、北は大阪湾東岸から南は紀伊半島南端から東部沿岸にかけての広い地域に、ほぼ一斉に目良式B類土器を使用する製塩がはじまったことを示している。この時点は、備讃瀬戸地方における台底付師楽式土器による製塩の開始とほぼ相前後するものであって、現在知られている限りでは、この地方が西日本に於ける土器製塩の先駆的な地方の一つであることを物語っている。」と記述した。

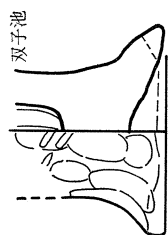
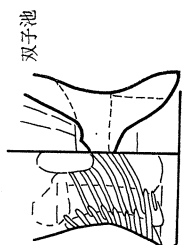
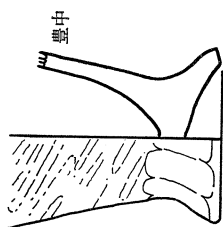
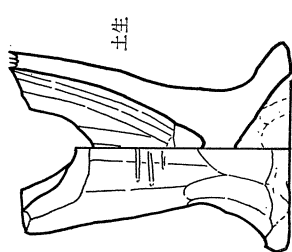
和泉地方の弥生時代末～古墳時代前期の製塩土器は一応Ⅰ～Ⅶ類に分類したが紀伊半島のものと次のように対照される。

和泉	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	(類)
紀伊			A		B		C	(類)

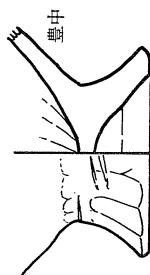
その結果従来迄に紀伊地方であまり出土しない新たな和泉Ⅰ及びⅡ類の存在が知り得た。即ち、紀伊のA類より更に高い脚台のものと、高い柱状部と広がる裾部を持つ脚台のものである。体部の形状は不明。形式的には紀伊A類＝和泉Ⅲ類に先行することは、Ⅲ類にまだ柱状部のなごりをとどめることから理解される。和泉地方でⅠ・Ⅱ類が出土する遺跡として上町・土生・豊

第1図 和泉地方に於ける製塩土器
(弥生時代末～古墳時代前期) 試表





V類



VI類



VII類



(注)

明確な型式編年はまだ確立していない。形態的にはおよそⅠ→Ⅶ型へと移行すると思われるが、その変化が短期間に行なわれる為、複数が共存している。

所属時期としては Ⅰ 類—「伝統的Ⅴ様式」Ⅰ

Ⅱ～Ⅵ類—「伝統的Ⅴ様式」Ⅱ

Ⅶ 類—「伝統的Ⅴ様式」Ⅲ～「布留式」

を考えているが、検討を要しよう。

中遺跡がある。特にⅠ類は「過渡期Ⅱ」のより古い段階の上町遺跡のみ出土し、それ以降の諸遺跡からの出土はない。「過渡期Ⅱ」以前に出現する可能性も考慮されるが、現在では上町遺跡の時期が最もさかのぼる。Ⅱ類は「過渡期Ⅱ～Ⅲ」の土器群に混存し出土するが、上町遺跡や豊中遺跡からみて「過渡期Ⅱ」に中心を置くとして理解される。最も後出するⅦ類は「布留式」に伴出すると考える。全体として紀伊地方と和泉地方と共通に変化するがいくつかの問題点が明確となる。即ち、紀伊地方にはあまり出土しない和泉Ⅰ・Ⅱ類の存在が知られ、その所属時期が「過渡期Ⅱ」もしくはそれを若干さかのぼる可能性があり、和泉Ⅲ類は「過渡期Ⅱ」に一般的で形態的には森・白石氏による第Ⅳ様式の可能性があった紀伊A類と共通する。今後両地方の関係がより検討される必要があるが、少なくとも紀伊A類の所属時期が弥生時代中期後半よりはむしろ、私見では「伝統的第Ⅴ様式」に伴出すると考える。より高い脚台群のⅠ類が最も先行する製塩土器として問題になろう。だが現在Ⅰ類の出土数は少なく類例発見が必要となる。

更に把握できたことを整理する。

1. 和泉地方に於ける弥生時代末～古墳時代前期の製塩土器は整理上Ⅰ～Ⅶ類に分類される。

なおまだ十分な型式編年は確立していないが、全体としておおむねⅠ類→Ⅶ類へと変化すると考えている。単期間の為当然共存する。

2. 形態的には最も先行する高い脚台のⅠ類は「伝統的第Ⅴ様式」第Ⅱ段階の古い時点に伴出し、出現はそれより若干さかのぼる可能性がある。だが「第Ⅴ様式」に迄さかのぼる証拠はない。またⅠ・Ⅱ類とも南接する紀伊地方ではあまり出土しておらず、和泉地方に先行形態がある。後出する和泉Ⅲ類と紀伊A類以降は両地方ともほぼ共通する様相をもって変化する。

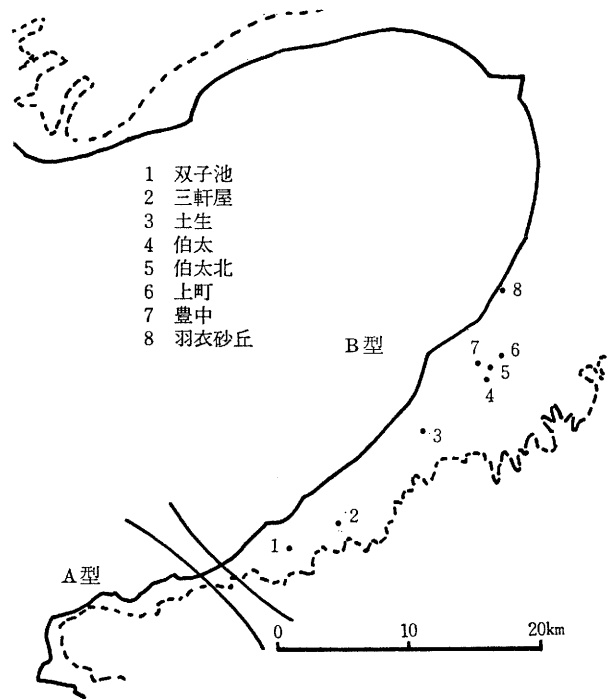
加えて瀬戸内海北岸地方の製塩土器と簡単に比較しておこう。この地方では弥生時代中期には既に土器製塩が確立しており、はるかに紀伊・和泉地方といった大阪湾沿岸諸地域より先行する。藤田憲司、柳瀬昭彦1974年によれば、この地方の製塩土器はA～Eタイプに分類され、Aタイプは中期末に相当する。基本的には外開きの脚台に深い体部がとりつく形態で、器形変化は一貫した流れとして理解される。体部外面の篋削り調整もこの地方の特徴である。和泉Ⅲ類以後はかなり近似した形態を呈するとは言え、製作技法もかなり異なり、両者の直接的関係はなおまだ不明である。とりわけ和泉Ⅰ・Ⅱ類に該当する器形は全く瀬戸内海北岸地域には出土せず、製塩土器にみる限り両地域の土器製塩にはかなりの隔りが存在する。両地域の相対関係については更

に検討を要しよう。

以上のような諸状況を踏えて和泉地方の土器製塩の実態を概括しておこう。この地方で土器製塩が開始されたのは、現在の知見による限り「第Ⅴ様式」以降の「伝統的第Ⅴ様式」に入ってからである。製塩土器の形態はその出現期に於て瀬戸内海沿岸地域のものとは異なり、この地方の独自性が考慮される。また南接する紀伊地方の土器製塩よりは時期的にわずかに先行する。紀伊地方に出現するのは和泉Ⅲ類の時点で、それ以後両者は継続並行することになる。和泉地方では製塩土器の出土は現在の海岸線より2Km～3Km、標高10～20mに立地する遺跡に多く認められ、その数も数10～数100個と比較的少ない。可能性として住居址中及びその近辺に使用地が考えられる。これは海岸線に直面して立地する紀伊地方の製塩遺跡とは立地タイプを基本的に異にする。諸状況から判断して、現時点では生産——消費の視点から整理上一応次のA～C型に区別して理解しておきたい。

A型 海岸に直面するという製塩にとっては積極的立地条件を持ち、製塩土器の出土数は無数とも言える多数に及ぶ。おそらく明確な製塩炉を持ち、可能性として生産・供給を実施すると考えられる。

第2図 和泉地方に於ける製塩土器出土主要遺跡



B型 海岸より数Km内陸という製塩にとってはやや消極的立地条件を持ち、製塩土器の出土数が数10～数100個と比較的少ない。製塩土器がおそらく一般的集落内の住居内あるいは近辺での使用が考慮される。直接に製塩、二次加工あるいは塩の消費にかかるものかは不確定。私見では二次加工に関するのではないかと推定するが現時点では論拠は少ない。集落内消費が考えられる。

C型 海岸より数10Km内陸という製塩にとっては全く否定的立地条件を持ち、製塩土器の出土

が全くないか極く少数にとどまる。内陸で出土する製塩土器は製塩遺跡より何等かの理由で搬入されたと考えられ、当然塩は生産地よりの搬入され消費される。

以上のように近畿地方の製塩土器出土遺跡の性格をおおよその目安をつけて一応整理し、各地の先駆的作業に依拠しつつも、今後とも検討してゆきたい。

VI まとめにかえて

これ迄「庄内式」「伝統的第Ⅴ様式」土器群及び製塩土器に関する認識を述べてきた。短時間内の記述の為十分意を得なかったが、簡単に整理することによりまとめにかえる。

かつて田中琢氏により「庄内式」と規定された土器は、私見ではその標式となる甕のみに該当し、型式学的には他の土器群とは異にする。胎土及び製作技術の諸点からその甕は河内地方中～南部のより限定された土器製作集団にかかる可能性を持ち、より山麓部に近い丘陵地域の集団と予想している。そして単一器種の大量供給を目的とした生産が行なわれ、畿内を若干越えた供給範囲を有し、かつこの製作にかかる先進的技術は集団の持つ専有技術であり、基本的には他集団、例え近接集団であっても、に伝授されることはない。この時代に於ける土器製作の技術はもはや文化的段階でなく、社会的段階に達していたのである。他集団は原則としておおむね「第Ⅴ様式」を踏襲し「伝統的第Ⅴ様式」土器群を製作していた。いわゆる「在地系土器」で地域内生産・消費が原則的には行なわれる。今回調査された豊中集団は、基本的には「伝統的第Ⅴ様式」土器群を持ち、「庄内式」甕の大量供給を受け、両者を消費していた和泉の一集団である。「布留式」への移行過程は本稿ではあまり触れなかったが、論理的には各地の「伝統的第Ⅴ様式」及び河内の「庄内式」がそのまま「布留式」へ直続しないことが明確となる。

従来実態が不明であった和泉地方の土器製塩は我々もようやく資料集収が開始することになった。現時点ではこの時代の製塩土器をⅠ～Ⅶ類に分類し、Ⅰ類が「伝統的第Ⅴ様式」第Ⅱ段階に属すると共に紀伊A類は和泉Ⅲ類に該当し、わずかながら先行形態をこの和泉地方に認めた。そして整理事業上紀伊の土器製塩を「生産・供給型」、和泉の土器製塩を「生産・消費型」と推定した。結果として紀伊の土器製塩諸集団と河内の「庄内式」甕生産（諸）集団とは基本的に共通する社会的側面を持つことを理解し、まさに和泉以外の地域には「政治性」への胎動が具体化していたのである。

最後に弥生時代～古墳時代に至る過渡期の史的 position を明確にすべく、それに先立つ周辺の遺跡群動向を概観し、諸認識を重視させておきたい。

豊中遺跡は大阪湾東側沿岸に位置し、この地の拠点集落として存在した池上弥生時代集落の西南 200m に接在する由に池上遺跡の動向が前提となる。第Ⅰ様式（新）段階に出現の池上遺跡は、当初よりおそらく環濠としての大溝や方形周溝墓等弥生集落の基本形態を完備し、この時点で環濠の範囲・住居域・墓域他諸機能域が設定され以後数百年間はほぼ踏襲される。集団の労働力と共同性は、大溝掘開やたぶん水田開拓・諸機能域設定の諸作業に発輝され、日常生活でも諸廃棄物を住居域と一定距離の窪地に投棄する等規則性を認めた。対外的には隣接の河内・紀伊地方と諸関係を持ち両地方の土器・石材等を搬入されるが、石材の多様性から交換体系の確立は不十分であると考えられる。前期の遺跡としては和泉地方沿岸部に四ツ池・池浦・春木八幡山他の遺跡が知られ、狭小な平野部入口に位置する四ツ池遺跡も同様に拠点集落としての役割を果たすことになる。

中期初頭以降には近畿中央部に広範囲な生産物交換体系が確立し、生産物移動が顕著となる。池上では更に外側へ新たな大溝が掘開される。当然共同労働の結果だが、矛盾現象も表面化する。即ち有時的大量労働力と共同性で掘開の大溝中には、無数の廃棄物が投棄され、大溝埋没を著じるしく早める結果となる。つまり日常生活の潜在的な非共同性が、生活集団全体の持つ有時的共同性に対抗し始める。しかし継続して労働力結集はなされ埋没大溝の再掘開を幾度か繰り返す。中期中頃には大溝が更に外側へ掘開され、おそらく灌漑用水路の機能を持つべく集落外よりの水路と結合し、前代の大溝が全く滞水していたこととは異なる。また住居個々の自立性と相まって、近接して貯蔵穴・廃棄物処理穴も設けられる。対外的には確立した交換体系に裏付けられることにより、各拠点集落は生産・消費型の経済体系を持つ。集団内部に於ては前期以来複数の小墓群に加え、中期後半には集落南側に複数の大型方形周溝墓群が新たに出現し、ここに明確な下位単位群の確立が表面化することになる。更に前期以来十数回に及んだ大溝再掘開は中止されることにより、集団全体の共同性の視覚的象徴たる環濠が消滅する。第Ⅳ様式の墓群が大溝埋没後に重複することから、その消滅時期が第Ⅳ様式前半期頃には確実に生じていたことが理解されよう。こうした現象とはほぼ時を相前後して周辺平野部の各地域に新たな遺跡（集落）の出現が急激となる。既に中期前半に先行していた伯太遺跡や大園・森・穴師・伯太北・七ノ坪・要池をはじめとした諸遺跡がこの時期に存在し、おおよそ視覚的には池上集落を核としたドーナツ現象を呈する。その出現背景は理解しないが、当然池上集団内部にみる下位単位群の確立及び環濠の消滅等がそうした状況の前提となるべき現象と思われる。この時代に於ても近畿地方中央部では確立した交換体系に裏付けられ、各地域集団間を各種土器類や石器素材をはじめとした各種生産物の移動事実が観察されると共に、各地域の拠点集落を核とした生産・消費体系をもって地域社会を構成していた。だが第Ⅳ様式の多数の諸遺跡は何故か単期間をもってその存続を一時中止

する。対して後背丘陵上にはいわゆる高地性集落たる惣の池・観音寺山・上松中尾といった諸集落が急遽出現し、和泉地方で活発な遺跡群動向を展開することになる。この地方に於ける高地性集落の出現は第Ⅳ様式末～第Ⅴ様式前半という極めて限定された時間を実施され、第Ⅳ様式での平地遺跡の減少と相まっていることが特徴である。その時点では交換体系そのものの破壊は決定的なものではなく、平地集落でも高地性集落でも各地の石器用石材や西ノ辻Ⅰ式土器等の移動も行なわれている。高地性集落の中でもとりわけ大規模な観音寺山遺跡は103軒の住居址と二重の環濠がみられ、集落形態としては中期池上遺跡とはほぼ共通する。かつ数群の住居址群は明確な複数下位単位存在を示し、池上遺跡との関連性をより検討される必要を考えている。第Ⅴ様式の池上遺跡は、住居址・井戸・方形周溝墓他をもって大規模に集落構成されており、生活領域が前代のをほぼ踏襲されるに加えて、方形周溝墓は前期以来の墓域に追加され、中期後半に出現した二群の大型方形周溝墓群のいずれにも全く追加されることはない。この注目すべき状況は中期大型方形周溝墓群を造営した階層諸成員の欠落とみられ、周囲に出現した中期後半諸遺跡との関係が注意されると共に、後続する高地性集落群との関係が更に注目されることになる。和泉平野を概観すれば、現在明確な第Ⅴ様式の遺跡としては池上・七ノ坪・要池・伯太遺跡等が知られているが、池上遺跡を除いてはいずれも集落址としての遺構は確認されてはいない。現時点で言えることは、第Ⅴ様式の平地遺跡が第Ⅳ様式及び伝統的第Ⅴ様式の遺跡数と比較して著じるしく少ないことは指摘されよう。可能性としては池上集落への回帰もしくは高地性集落への移動が当然考えられる。極端に図式的に整理すれば、池上（平地）——惣の池・観音寺山・上松中尾（丘陵上）が対比されることになり、第Ⅴ様式に於ける和泉地方平野部での大規模集落としてはまさに池上遺跡のみという異常な状況を呈することになる。また観音寺山遺跡がなおまだ中期的集落形態を持つに対し、池上遺跡は既に環濠を持たないに加えて、方形周溝墓は中期の複葬から後期は単葬へと移行し、群構成する井戸は各群毎に独自の小祭祀を持つ傾向を示すという個人や小集団の分化が顕著になる状況をみせている。この時代に於ては土器にみる限り、西ノ辻Ⅰ式以降～庄内式に至る間しばらく他地方のものが搬入されることは極めて少なくなり、確立した交換体系により供給されてきた石器用石材による石器製作も中止される。そして全く供給体制を異にする鉄製品にすべて変換する。おそらく従来の近畿地方中央部の中期大社会を越えた地域との強い関係をもって鉄製品あるいは鉄素材が搬入されることになったのだろうが、従来の土器移動の中止と遠隔集団との強固な結び付き及び異常な集落配置と立地といった諸状況は、極めて政治的色彩を帯びた感を呈する。

こうした諸状況を経て、今回視点をあてた「伝統的第Ⅴ様式」の時代を迎える。既に高地性集落は放棄され、著じるしい数の小集落が平地上に設定されることになるが、もはやこの時代には

かつての池上集落という拠点的様相を持つ大規模集落は分解しており、極めて広範囲に立地条件に応じて点存あるいは列存する小集落群として視覚的には拡散的に分布するという状況を示す。今回とりあげた豊中遺跡もまさにそれらの中の一つである。この時代に於ては幾度か述べたように河内あるいは紀伊地方では生産・供給型の諸集団の出現をみ、既に政治的・社会への移行が具体化かつ表面化しつつある。おそらく相前後して出現する大規模な前期古墳を有する畿内中央部の諸勢力とのかかわり合いをもっていることは当然考えられよう。しかしかなり等質の様相を呈する多数の小集落が群存する和泉地方に於ては、なおまだ明確な生産・供給型諸集団の存在を確認しておらず、可能性として生産・消費型の傾向をとどめていると言えよう。この時代に於ても和泉地方ではなおまだ現象的に明確な政治的動向を検証することは現時点では困難である。激しい政治的・社会への時代的接近という歴史の流れの中で、伝統的な地域社会性を強く遺存させつつ、この地で明確に政治関係が具体化かつ表面化する四世紀後半へと時代が進むことになる。

(付記)

本稿作成については、和泉地方に於て発掘調査に従事される多数諸氏をはじめとして西山要一氏には有益な御教示・資料提供を、更に土器製塩に関しては近藤義郎氏に多くの御教示を受けた。文末ながら記して感謝いたします。

(酒井龍一)

引用及び参考文献

- 安達厚三・木下正史 「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』第60号第2巻
 石神怡 1975 『大園遺跡発掘調査概要』Ⅱ
 石部正志 1970 『鶴山地区信太山遺跡(その2)調査概報』
 1975 『古墳文化論——群集小古墳の展開を中心に』『日本史を学ぶ』Ⅰ 原始・古代
 石野博信 1972 「奈良県纏向遺跡の調査」『古代学研究』第65号
 芋本隆裕他 1975 『東大阪市遺跡保護調査会年報Ⅰ』
 宇田川誠一 1959 『羽衣砂丘遺跡調査報告』(大阪湾沿岸の古代漁村集落の一資料)
 置田雅昭 1974 「大和における古式土師器の実態」『古代文化』第26巻第2号
 近藤義郎 1964 「古目良遺跡」『田辺文化財』8
 酒井龍一 1975 「和泉における弥生式～土師式土器の移行過程について」『上町遺跡発掘調査概要』
 佐原真他 1970 『池上・四ツ池』1970
 高橋一夫 1975 「和泉・鬼高期の諸問題」『原始古代社会研究』2
 田中琢 1965 「布留式以前」『考古学研究』第12巻第2号
 都出比呂志 1974 「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』第20巻第4号
 坪井清足 1965 『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』
 原口正三 1969 「大阪府松原市上田町遺跡の調査」『大阪府島上高等学校研究紀要』
 原口正三他 1972 『船橋Ⅰ・Ⅱ』(復刻)
 藤田憲司・柳瀬昭彦 1974 「上東遺跡」『山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ』
 藤田正篤 1971 「三軒屋大斗木遺跡その後」『会報』6 和泉古代文化研究会

- 西山要一 1971 「泉南市双子池遺跡採集の遺物——特に製塩土器について」『会報』7 和泉古代文化研究会
- 森浩一 1960 「製塩についての二つの覚え書」『古代学研究』第23号
- 森浩一他 1968 『紀淡・鳴門海峡地帯における考古学調査報告』
- 森浩一他 1968 『観音寺山弥生集落調査概報』
- 第2 阪和国道内遺跡調査会 1971 『池上・四ツ池遺跡』16
- 1970 『池上・四ツ池』
- 1971 『第2 阪和国道内遺跡調査報告書』4
- 1973 『第2 阪和国道内遺跡調査報告書』1～3
- 豊中・古池遺跡調査会 1974 『豊中・古池遺跡発掘調査概報』そのⅡ
- 大阪府教育委員会 1974 『セノ坪遺跡発掘調査概要』
- 1973 『池上遺跡発掘調査報告書』Ⅱ
- 1974 『池上遺跡発掘調査報告書』Ⅲ
- 1975 『大園遺跡発掘調査概要』Ⅱ
- 和泉市教育委員会 1975 『上町遺跡発掘調査概要』
- 1973 『和泉の文化財』1・2
- 岸和田市教育委員会 1975 『土生遺跡発掘調査概要』第2次・第3次
- 堺市教育委員会 1975 『土師遺跡49年度発掘調査概報』

その他大阪府・和泉市・泉大津市・岸和田市・高石市他教育委員会等による調査成果を参考にさせていただいた。